

# 主体的・対話的で深い学びを実現するための 総合的な学習の時間の単元開発に関する研究 ——自己のキャリア形成に関する学習活動の設定を通して——

百瀬 光 一  
下 崎 聖

## はじめに

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2016年12月21日）（以下、「中教審答申（2016年12月21日）」と略記）では、「主体的・対話的で深い学び」を実現することの重要性が指摘されている<sup>1)</sup>。この「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、「人間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくこと<sup>2)</sup>とし、具体的に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点に立った授業改善を行うことが重要であるとしている<sup>3)</sup>。

これらの三つの視点は、「子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものでもあるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要である」<sup>4)</sup>（下線：百瀬）としている。さらに、「単元や題材のまとまりの中で、子供た

ちの学びがこれら三つの視点を満たすものになっているか、それぞれの視点の内容と相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し改善していくことが求められる」<sup>5)</sup> (下線：百瀬) としている。

以上のこのことから、「主体的・対話的で深い学び」を実現していくためには、日々の授業の中で、子供たちの「学びの過程」をどのように工夫していくか、つまり、具体的に単元や題材をどのように構成していくかが重要なポイントとなる。

そこで本研究<sup>6)</sup>は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための総合的な学習の時間の単元開発について追究する。具体的には、特別支援学校高等部（知的障害）の生徒を対象に、総合的な学習の時間で重視されている「探究的な学びの過程（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）」の中に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込みながら、自己のキャリア形成に関する学習活動を設定した単元開発を行い、授業実践を通して、その有用性について追究することにした。このように、総合的な学習の時間で「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を単元のどこに、どのように用いるかを具体的に明示しながら単元開発を行った先行研究はなく<sup>7)</sup>、今後追究すべき重要な課題であるといえる。この点が、本研究の独自性である。

なお、本研究で開発した単元の有用性については、授業後に生徒に実施したアンケート、生徒の授業後の感想、授業者による個々の生徒の評価の3点<sup>8)</sup>から検証することにした。

## 1 主体的・対話的で深い学びを実現するための総合的な学習の時間における単元開発

### (1) 生徒の実態

実践学級は、A県立B特別支援学校高等部（知的障害）に在籍する1年生6名（男子5名、女子1名）<sup>9)</sup>からなる学級である。どの生徒も入学当初から、卒業後の一般企業等への就労を強く意識しながら、目的意識を持って学校生活を送っている。障害の程度は、どの生徒も軽度である。また、男子と女子の人数に偏りがあるが、全員が仲良く、協力し合って諸活動に取り組んでいる。しかしながら、現段階では、自分の長所をしっかりと自覚し、それを生かしながら、具体的にどんな職種に就きたいかということに関しては、まだはっきりとイメージ化はされていない。この点が、実践学級にとっての今後の重要課題である。

### (2) 単元名

単元名は、「今年1年の学校生活を豊かにするために、自分が取り組むべきこと・努力すべきことを考え、自分に提案しよう」とした。また、単元設定の時期は、2017年5月中旬から6月下旬までとし、授業は、下崎が担当することにした。全11時間扱いである。

### (3) 単元設定の理由

個々の生徒の実態として、入学当初から、卒業後の就労を意識しながら、目的意識を持って日々の学校生活を送っているが、現段階では、自己のキャリア形成に関する具体的な見通しはしっかりと持っていない。そこで、本単元「今年1年の学校生活を豊かにするために、自分が取り組むべきこ

と・努力すべきことを考え、自分に提案しよう」を設定することで、自己理解を深めながら、今年1年間における自己課題の明確化を図ることにした。

#### (4) 単元目標

本研究では、総合的な学習の時間において、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための単元開発を行うものである。また、具体的な学習活動として、自己理解を中心とした自己のキャリア形成に関する活動<sup>10)</sup>を設定する。そこで、生徒の実態を踏まえながら、中教審答申(2016年12月21日)(別紙)で示された「キャリア教育に関わる資質・能力」<sup>11)</sup>と、新学習指導要領(2017年3月31日告示)における小・中学校の総合的な学習の時間の目標<sup>12)</sup>を参考にして、下記の単元目標を設定した。

- ① 自分の長所と自己課題を自己分析したり、お家の方や身近にいる人にインタビューしたりして、理解することができる。【知識・技能】
- ② 自分の考えを筋道立てて分かりやすくクラスの友達に伝えることができる。【思考力・判断力・表現力等】
- ③ 自己課題を解決するための具体的な提案を考えることができる。【思考力・判断力・表現力等】
- ④ 今年1年間の自己課題を設定し、解決しようとする意欲を持つことができる。【学びに向かう力・人間性等】

#### (5) 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込んだ単元開発

総合的な学習の時間では、「探究的な学習の過程」が重要となる。この過程は、具体的には、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の四つの段階からなる。そこで本研究では、この四つの段階に、

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込んだ単元開発を試みることにした。中教審答申（2016年12月21日）によれば、この三つの視点は、具体的に下記の通り示されている。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。以下は略する。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。以下は略する。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか<sup>13)</sup>。以下は略する。

上記を踏まえながら、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込んだ具体的な単元開発の内容について詳述する。なお、中教審答申（2016年12月21日）で具体的に示された、総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点<sup>14)</sup>も合わせて参照した。

まず、「主体的な学び」については、「課題の設定」の段階で、生徒に「年間行事予定表」を提示しながら、1年間の学校生活の見通しを持たせるとともに、就職を目指す上で重要な行事となる「校内実習」と「職場体

験学習」については詳しく説明を加え、今後の学習に対する意欲の喚起を図ることにした。また、「情報の収集」の段階で、今までの学習面や生活面を「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」という「見方・考え方」を基に振り返ることを通して、自己理解を図るようにした。さらに、「まとめ・表現」の段階で、各自が発表した提案内容（「今年1年の学校生活を豊かにするために、自分が取り組むべきこと・努力すべきこと」）については、継続的に自己評価をさせながら、自己点検をさせていくことにした。

次に、「対話的な学び」については、「情報の収集」の段階で、自分の考えを広げるために、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析する以外に、同じ内容をお家の方や身近にいる人に対してインタビューする活動を設定することにした。このお家の方へのインタビュー活動については、百瀬・下崎による先行研究においても、その有用性が確認されている<sup>15)</sup>。そのため、本研究でも、このお家の方や、さらに身近にいる人へのインタビュー活動を設定し、自分の考えが広がることを期待した。また、「まとめ・表現」の段階では、自分の考えを広げたり、深めたりするために、発表者による一方向的な発表ではなく、聞き手も一言発表者に対して感想を言わせることで、双方向性のある発表会となるようにした。この双方向性のある発表会についても、百瀬・下崎による先行研究において、その有用性が確認されている<sup>16)</sup>。さらに、各自が発表した提案内容に関しては、自己評価以外にクラスメートによる他者評価も適宜実施することにした。

最後に、「深い学び」については、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることが重要となる。中教審答申（2016年12月21日）によれば、総合的な学習の時間の「見方・考え方」は、「探究的な（探究の）見方・考え方」<sup>17)</sup>として、次のように示されている。すなわち、「各教科等

における『見方・考え方』を総合的（・統合的）に働かせて、広範（かつ複雑）な事象を多様な角度から俯瞰<sup>みかん</sup>して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の（在り方）生き方と関連付けて問い続けること<sup>18)</sup>（括弧内：高等学校）である。

本研究では、「情報の収集」と「整理・分析」の2つの段階で、生徒の実態を踏まえながら、この「見方・考え方」を活用させることにした。

「情報の収集」の段階では、「見方・考え方」として、「自分の好きなこと・得意なことと、嫌いなこと・苦手なこと」を、「整理・分析」の段階では、「見方・考え方」として、「自分にとってのベスト3（順位付け）」「自分にとってのメリット、デメリット」の2つを働かせ、それぞれ自己の生き方について多面的・多角的に考えさせることにした。

この中の「自分にとってのベスト3（順位付け）」は、百瀬・下崎の先行研究においてもその有用性が確認されている<sup>19)</sup>。また、「自分にとってのメリット、デメリット」は、後述する「6色ハット発想法」の中で用いるものである。これと関連した先行研究として、三田大樹による小学校の総合的な学習の時間の実践がある。そこでは、「深い学び」につなげるための手段として、思考ツールである「メリット・デメリットチャート」を有効的に活用している<sup>20)</sup>。本研究でも、自己の生き方について多面的・多角的に考えさせるために、「自分にとってのメリットとデメリット」という見方・考え方を活用することにした。

以上を踏まえ、開発した単元構成を表1に示す。なお、表中の「指導・助言、教材（『 』）」欄で、「※」が付記されている教材は、次節の「(6) 活用した教材」で詳述する。

表1 単元構成

探究的な学習の過程 (11H)	指導・助言、教材 (『 』)	「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点
<p>(1) 課題の設定 (1 H)</p> <p>①今年1年、具体的にどんな学習活動(行事)があるのか確認する。</p> <p>②「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」をはっきりさせながら、年間行事を基に今年1年頑張っ取り組むべきこと・努力すべきことを自分自身に提案することを確認する。</p>	<p>・今年度の『年間行事予定表』を基に1年間の学習活動の見通しを持たせる。</p> <p>・これから学習する単元の中身(今年1年の学校生活を豊かにするために、自分が取り組むべきこと・努力すべきことを考え、自分に提案すること)を伝え、本単元における学習の見通しを持たせる。</p> <p>・さらに、お家の方や身近にいる人にもインタビューをすること、PCを用いてプレゼンテーションを行うことも合わせて伝える。</p>	<p>●年間行事に位置付けている「校内実習」「職場体験学習」等については詳しく触れ、自己のキャリア形成に関する見通しを持たせながら、意欲を喚起させる【主体的な学び】。</p>
<p>(2) 情報の収集 (2 H)</p> <p>①まず、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について自己分析してみる (1 H)。</p>	<p>・「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について『学習カード1』※の上半分を基に自己分析をさせる。</p>	<p>●今までの学習面や生活面を「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」という「見方・考え方」を基に振り返りながら、自己理解を図る【深い学び】、【主体的な学び】</p>
<p>②次に、同じことをお家の方や身近にいる人にもインタビューして聞いてみる (1 H)。</p>	<p>・『学習カード2』※を用いながら、お家の方や身近にいる人に、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」をインタビューさせる。</p>	<p>●さらに、お家の方や身近にいる人と対話しながら、自己理解を広げる【対話的な学び】。</p>
<p>(3) 整理・分析 (3 H)</p> <p>①自己分析とお家の方や身近にいる人へのインタビューを基に「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について整理する (1 H)。</p>	<p>・『学習カード1』※の下半分を用いながら、「自分の好きなこと・得意なことと」、「嫌いなこと・苦手なこと」をそれぞれ3つに整理させる(ベスト3を考えさせる)。</p>	<p>●「自分にとってのベスト3」という「見方・考え方」を用いて「自分の好きなこと・得意なことと」、「嫌いなこと・苦手なこと」をそれぞれ整理させる【深い学び】。</p>
<p>②①を基に「6色ハット発想」を用いて、「今年1年</p>	<p>・『6色ハット発想法』※(白帽子:自分自身に関する現状分析、赤</p>	<p>●さらに、「提案内容」が現実的かどうか、「自</p>



<p>の学校生活を豊かにするために、自分が取り組むべきこと・努力すべき提案内容を考える（2 H）。</p>	<p>帽子：現状分析に対して感じていること・考えていること、緑帽子：提案する今後自分が取り組むべきこと・努力すべきこと、黄帽子：提案内容のメリット、黒帽子：提案内容のデメリット、青帽子：まとめ）を用いながら、提案内容を熟考させさせる。</p>	<p>分にとつてのメリット、デメリット」という「見方・考え方」を基に検討させる【深い学び】。</p>
<p>(4) まとめ・表現(5 H) ①プレゼンテーション・ソフトを用いて、発表内容をまとめる(3 H)。</p>	<p>・『学習カード3』※を用いて下書きさせてから、『プレゼンテーション・ソフト』※を活用させる。 ・表紙の画面、白帽子画面2枚、赤帽子画面、緑帽子画面、黄帽子画面、黒帽子画面、青帽子画面の計8画面を作成させる。 ・文字の大きさは、40ポイントとする。</p>	
<p>②クラス内発表を行う(2 H)。</p>	<p>・聞き手は、『学習カード4』※を基に評価しながら、発表を聞かせる。 ・一人一人の発表後、聞き手に一言感想を言わせるようにする。  ・2週間ごとに「提案内容」の見直しをさせ、適宜修正を図るようにしていく。</p>	<p>●聞き手にも感想を発表させることで、双方向性のある発表会とする。 【対話的な学び】 ●提案内容については、継続的に自己評価及び他者評価をさせながら、検討させていく【主体的な学び】、【対話的な学び】。</p>

## (6) 活用した教材

ここでは、表1の「指導・助言、教材（『 』）」欄で、「※」が付記されている教材について詳述する。なお、表2から表5及び図1の中で、斜体で表記された内容は、実践学級のC子が実際に記したものである。その中の下線及び括弧は、百瀬が文意を壊さないように配慮しながら、加筆修正を行ったものである。

### 1) 学習カード1

学習カード1（表2<sup>21)</sup>参照）の上部は、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」という「見方・考え方」を用いなが

表2 学習カード1

自分をよく見つけながら、「自分の好きなこと・得意なことと、 逆に嫌いなこと・苦手なこと」について書き出してみよう。 名前 ( C子 )	
【自分の好きなこと・得意なこと】	【嫌いなこと・苦手なこと】
<b>【りょうり】</b> ・おかし ・色々なりょうり <b>【スポーツ】</b> ・卓球 <b>【あそび・話】</b> ・小さい子とあそぶこと ・かぞ(ぞ)くと話すこと ・友達と遊ぶこと <b>【そうじ】</b> ・へやをキレイにすること <b>【花】</b> ・花を育てたり見たりすること <b>【リラックス】</b> ・ゴロゴロする ・夜、空でほしを見る ・本を読む <b>【見ること】</b> ・ゲームをする ・テレビを見る <b>【音楽】</b> ・歌うこと ・聞くこと	<b>【スポーツ】</b> ・マラソン ・なわとび ・フットサル <b>【おきる】</b> ・朝を(朝)おきること <b>【人とかかわること】</b> ・人にかかわること <b>【食べ物】</b> ・おんせんゆでたまご ・目だまやき ・ゴーヤ <b>【勉強】</b> ・しゆくだい ・目標
自己分析及びお家の方や身近にいる人へのインタビューを基にそれぞれのベスト3を決め出そう。	
自分の好きなこと・得意なことベスト3	嫌いなこと・苦手なことベスト3
第1位 ・小さい子とあそぶこと 第2位 ・そうじすること 第3位 ・りょうりしてくれるとこ	第1位 ・朝おきるのがおそいとこ 第2位 ・マラソンが苦手なとこ 第3位 ・勉強がキライなとこ

ら、自己分析を通して自己理解を図らせることにした。さらに下部は、自己分析及びお家の方や身近にいる人へのインタビューを通して得た「自分の好きなこと・得意なこと」と「逆に嫌いなこと・苦手なこと」の情報を基に、それらに対比させながらベスト3を決め出す(順位付けする)ことで、自分の考えを整理し、より深い自己理解を図らせることをねらった。

## 2) 学習カード2

学習カード2(表3参照)は、お家の方や身近にいる人にも自分の「好

表3 学習カード2

お家の方や身近にいる人に、みなさんの「好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」についてインタビューしてみよう。 名前 ( C子 )	
インタビューした人 (お母さん)	
【好きなこと・得意なこと】	【嫌いなこと・苦手なこと】
・やさしい ・家のことをしっかりかんがえてくれる	・なし
インタビューした人 (友達)	
【好きなこと・得意なこと】	【嫌いなこと・苦手なこと】
・フレンドリー ・そうだんをしっかり聞いてくれる ・小さい子のめんどうみがいい ・笑顔がかわいい ・キレイづ(ず)き ・みんなをまとめてくれる	・朝おきるのがおそい ・たまににじゅうじんかくがある ・おこるとこわい
インタビューした人 (先生)	
【好きなこと・得意なこと】	【嫌いなこと・苦手なこと】
・下の子のめんどうをみている ・学校(を)ががんばっている ・人の話し(話)をすなおに聞ける ・よくないことをよくないとはっきりいえる	・なし

好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」についてインタビュー活動をするときに活用するものである。ここでも、生徒に「好きなこと・得意なこと」と「嫌いなこと・苦手なこと」が対比して捉えられるように構成した。

### 3) 6色ハット発想法

6色ハット発想法とは、エドワード・デ・ボーンが考案した多角的にアイデアを出すための発想法である<sup>22)</sup>。6色の帽子には、次に示す通り、それぞれに異なった意味が付加されている。白の帽子は、事実の帽子で、現状を把握し、明確な事実や情報を出すときに、赤の帽子は、感情の帽子で、問題について感じたこと、直感で思ったことを表現するときに、緑の帽子は、提案の帽子で、これまでの情報を踏まえて、具体的な提案を出す

ときに、黄色の帽子は、評価の帽子で、出てきた提案に対して、プラス思考で評価するときに、黒色の帽子は、デメリットの帽子で、実現性があるかどうかなどデメリットやリスクを挙げるときに、青色の帽子は、まとめの帽子で、これまでの議論を冷静に見直してまとめるときに、それぞれ活用するものである<sup>23)</sup>。

使う帽子の順番及び回数については、生徒が混乱なく、思考しやすくなるようにと考え、上記の記述順にそれぞれ1回ずつ用いることにした。また、赤い帽子の感情は、生徒に自分の良さにも目を向けさせるために、「問題」に限定するのではなく、白の帽子の「事実」に対しての感情とした。さらに、黄色の帽子は、黒色の帽子と対比する「メリットの帽子」と簡単に表現することにした。

本研究では、先述した「自分のためのメリット、デメリット」という「見方・考え方」を用いて、生徒に自己の生き方について多面的・多角的に考えさせるため、このような6色ハット発想法を活用することにした。

#### 4) 学習カード3

学習カード3 (表4参照) は、6色ハット発想法を基に、6色の帽子の各働きを意識させながら、自分の考えを筋道立ててまとめさせていくために活用するものである。さらに、この学習カード3は、プレゼンテーション・ソフトを活用する場面での下書きも兼ねるようにした。また、先述した学習カード1と学習カード2とを合わせ、これらを学習カード1 (上部)・学習カード2→学習カード1 (下部)→学習カード3という手順で生徒に活用させることで、生徒たちに自分の思いや考えの具体化を図らせるようにした。百瀬・下崎の先行研究においても、このことの有用性が確認されている<sup>24)</sup>。



<p>学校生活を豊かにするために</p> <p>自分への提案</p> <p>名前 C子</p> <p>1</p>	<p>自分自身に関する現状から 「自分の好きなこと・得意なこと」 ベスト3</p> <p>①みんなとあそぶこと 外出など ②そうじをすること ③料理をすること</p> <p>2</p>	<p>自分自身に関する現状から 「自分の嫌いなこと・苦手なこと」 ベスト3</p> <p>①朝起きるのがおそいこと ②マラソンが苦手なこと ③勉強が苦手なこと</p> <p>3</p>
<p>自分自身に関する現状から 感じていること・考えていること</p> <p>・嫌いのほうが少ないので苦手なこ とを少しずつ直していきたいです ・漢字練習がんばりたい ・料理のお手伝いをしたいです</p> <p>4</p>	<p>【提案】 今後自分が取り組むべきこ と・努力すべきこと</p> <p>・朝、時間どおりに起きる ・毎日漢字練習をする ・料理のお手伝いをする</p> <p>5</p>	<p>提案内容に対するメリット</p> <p>・朝、時間に余裕が持てる ・毎日やるだけで色々と覚えら れる ・料理をしていると手際が良くなる</p> <p>6</p>
<p>提案内容に対するデメリット</p> <p>・朝、起きると気持ちが悪くなる ・毎日やることで面倒くさくなっ てしまう ・料理をすると失敗してしまう</p> <p>7</p>	<p>まとめ</p> <p>・毎日、アラームをかけて時間ど おりに起きる ・毎日1日1ページ漢字練習をする ・夜ごはんの料理をお手伝いする</p> <p>8</p>	

図1 C子がプレゼンテーション・ソフトで作成した8つの画面

表は、生徒にとっては初めての経験であり、また、パソコンを活用しながらの発表ということで、生徒たちの意欲的な発表の姿と、視覚的な効果を期待した。実際に、C子がパワーポイントで作成した8つの画面は、図1の通りである。

#### 6) 学習カード4

学習カード4(表5参照)は、プレゼンテーションの自己評価(上部)と他者評価(下部)を行うときに使用するものである。評価の観点は、①「プレゼンテーションの画面は、見やすかったか?」、②「発表内容は、分かりやすかったか?」、③「発表の声は、適切だったか?」、④「発表の速さは、適切だったか?」の4観点とし、3段階評価を用いることとした。

なお、下部は、一言感想を述べた後、点線部を切り離して、発表者に直接手渡すようにした。この一言感想は、先述した双方向性のある発表会になるようにと、聞き手が発表者に対して自分なりの思いや考えを伝えるた

表5 学習カード4

(自己評価)	3段階評価 (◎：とても良い、○：良い、△：努力が必要)
① プレゼンテーションの画面は、見やすかったか？	( ◎ )
② 発表内容は、分かりやすかったか？	( ○ )
③ 発表の声は、適切だったか？	( ○ )
④ 発表の速さは、適切だったか？	( ○ )
-----	
( F男 ) さんへ	
① プレゼンテーションの画面は、見やすかったか？	( ◎ )
② 発表内容は、分かりやすかったか？	( ◎ )
③ 発表の声は、適切だったか？	( ◎ )
④ 発表の速さは、適切だったか？	( ◎ )
【一言感想】	
・よく自分のことがわかっていて、それをしっかりとらっぴょうできている。( C子 ) より	

めに設定したものである。今まで友達の発表に対する感想を述べる経験が少なかったという生徒たちの実態を踏まえ、特に「リアクションの型」は示さず、4つの評価の観点を参考にさせながら、自由に発表できるようにした。さらに、「一言感想」では、「一言」という言葉を添えることで、生徒が気張らずに感想発表ができるようにと配慮した<sup>25)</sup>。

## 2 生徒の反応

授業での生徒の反応について、授業後に生徒に実施したアンケート、生徒の授業後の感想、授業者による個々の生徒の評価の3点から確認していくことにする。

### (1) 授業後に生徒に実施したアンケート

授業後に生徒に実施したアンケートの結果は、表6<sup>26)</sup>の通りである。アンケートの6つの質問項目の内、5つの質問項目(質問①「自分の考えを『6色ハット発想法』を用いて、クラスみんなに分かりやすく伝えることができましたか?」、質問②「『自分の好きなこと・得意なことと、逆に

嫌いなこと・苦手なこと』について、自分で振り返ったり、お家の方や身近にいる人にインタビューしたりして、自分の長所と自分の課題を理解することができましたか?」、質問③「友達の発表したいことが分かりましたか?」、質問⑤「自分にとってのメリットとデメリットを考えながら、自分の課題を解決するための具体的な提案について考えることができましたか?」、質問「⑥今年1年間の自分の課題を設定し、それを解決しようとする意欲を持つことができましたか?」が、全生徒による肯定的な回答を得ることができた。

しかしながら、質問④「友達の発表に対して、自分の感想を分かりやすく伝えることができましたか?」は、F男のみが、「あまり分かりやすく伝えることができなかった」と否定的な回答を示した。

## (2) 生徒の授業後の感想

生徒の授業後の感想については、「お家の方や身近にいる人へのインタビューをしての感想」と「授業全体の感想」の2種類<sup>27)</sup>をここで紹介する。また、文中の下線及び括弧は、百瀬が文意を壊さないように配慮しながら、加筆修正を行ったものである。

### 1) お家の方や身近にいる人へのインタビューをしての感想

- ・ とてもはずかしい感じだった。(A男)
- ・ 自分は、苦手なことや好きなことがいろいろあってびっくりしました。(B男)
- ・ 自分と同じこともあれば、こんなことがあったんだと思いました。家の人が思っていることが色々あった。(C子)
- ・ 自分の苦手なことなどたくさんわかってよかった。好きなことも、キラいなこともわかってよかった。(D男)
- ・ みんな (は) とても (自分がよ) い生活 (を) しているだな (と思っ



表6 アンケートの結果

<p>①自分の考えを「6色ハット発想法」を用いて、クラスのみみんなに分かりやすく伝えることができましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とても分かりやすく伝えることができた・・・2名 (A男、E男)</li> <li>・少し分かりやすく伝えることができた・・・4名 (B男、C子、D男、F男)</li> <li>・あまり分かりやすく伝えることができなかった・・・0名</li> <li>・まったく分かりやすく伝えることができなかった・・・0名</li> </ul>
<p>②「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自分で振り返ったり、お家の方や身近にいる人にインタビューしたりして、自分の長所と自分の課題を理解することができましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とてもできた・・・2名 (A男、F男)</li> <li>・少しできた・・・4名 (B男、C子、D男、E男)</li> <li>・あまりできなかった・・・0名</li> <li>・まったくできなかった・・・0名</li> </ul>
<p>③友達の発表したいことが分かりましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とても分かった・・・4名 (A男、B男、D男、E男)</li> <li>・少し分かった・・・2名 (C子、F男)</li> <li>・あまり分からなかった・・・0名</li> <li>・まったく分からなかった・・・0名</li> </ul>
<p>④友達の発表に対して、自分の感想を分かりやすく伝えることができましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とても分かりやすく伝えることができた・・・2名 (A男、D男)</li> <li>・少し分かりやすく伝えることができた・・・3名 (B男、C子、E男)</li> <li>・あまり分かりやすく伝えることができなかった・・・1名 (F男)</li> <li>・まったく分かりやすく伝えることができなかった・・・0名</li> </ul>
<p>⑤自分にとってのメリットとデメリットを考えながら、自分の課題を解決するための具体的な提案について考えることができましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とてもできた・・・4名 (A男、B男、C子、F男)</li> <li>・少しできた・・・2名 (D男、E男)</li> <li>・あまりできなかった・・・0名</li> <li>・まったくできなかった・・・0名</li> </ul>
<p>⑥今年1年間の自分の課題を設定し、それを解決しようとする意欲を持つことができましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・とても持てたと思う・・・4名 (A男、B男、D男、F男)</li> <li>・少し持てたと思う・・・2名 (C子、E男)</li> <li>・あまり持てたとは思わない・・・0名</li> <li>・まったく持てたとは思わない・・・0名</li> </ul>

ている)と思いました。(E男)

- ・ 普段自分が無いしきにやっていることがわかり(、)なおせるかだいができました。(F男)

個々の生徒の感想から、お家の方や身近にいる人とインタビューによる

対話を通して、自己理解を広げている様子を確認することができる。特にA男は、「とてもはずかしい感じだった」と感想を記したが、先述したアンケートの質問②「『自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと』について自分で振り返ったり、お家の方や身近にいる人にインタビューしたりして、自分の長所と自分の課題を理解することができましたか?」に対して、A男の「とてもできた」という回答の結果から、はずかしさの中にも自己理解を広げていったことが推察できる。

## 2) 授業全体の感想

- ・ みんな、それぞれ目標をもっていてすごいと感じた。  
とても、メリットやデメリットを考える時がたいへんだっし、くろうした。ホットした。(A男)
- ・ みんなとくいなことや苦手なことがいろいろあるんだなあと思いました。みんなのことがくわしくしれてよかったなあと思いました。自分も成長したかなあと思いました。  
発表会まで、いっぱい練習して、やり直しをしたり、いろいろあったけど、本番は、うまくいえたかなあと思いました。自分は成長できたかなあと思いました。この発表で学んだことをいかして、これからも頑張っていきたいです。(B男)
- ・ 自分たちの好きなこと、きれいなことをよく知って(、)これからのことにやくだてる(やくだっていく)んじゃないかと思いました。  
さいしょの年間けいかくからはじまって(、)さいごにメリット(と)デメリット、人がおもっていること(、)自分が思っていることを協力し(、)自分のよさやわるさがよくわかりました。自分のことだけじゃあ(では)なく(、)友達のことも分かったのでよかったです。(C子)
- ・ 発表をして、皆にこういう人なんだなあ～と言うことがわかって(もらって)よかった。自分も自分の事を知れてよかった。

皆の発表を聞いて、たくさんの事を知れてよかったです。自分もしっかり発表できてよかったです。大きな声で、できてよかった。(D男)

- ・ みんなしっかり声がでていてよかったと思いました。みんなの感想をみてとてもいいきもちになりました。

5月からはじめてから少しきんちょうしてはいたけど(,)6月になって発表が終わってからまんぞくしてほっとしました。(E男)

- ・ この人はこんなのがすきで(,)こんなのがきらいだと思い(,)自分のかだいもみつけていてすごいと思いました。

初めは自分のすきなことやきらいなことが10個ぐらいから5つになったり(,)さいごには3つになり(,)かなりへってきたな—と思いました。パソコンでもいろんなのをかきこんだりして(,)紙とはちがうほうを(発表で)見ることができました。できあがって(,)さいごのかくにんもしたあとののはっぴょうでも(,)さいごのさいごで「かえ(れ)ばよかった」と思う所もあり(,)少しアドリブをつかってかえてしまいました。以下は略する。(F男)

生徒により文章の長短はあるものの、どの生徒も自分なりに肯定的な感想を記している。

A男は、全員が自分に対する提案内容が確定し、自分なりの目標が持てたことに感心している。また、A男は、探究的な学びの過程の中で、提案内容に対するメリットとデメリットを考えた場面を採り上げ、苦戦しながらも考え抜いた安堵感を表している。

B男は、この発表会を通して、友達のことをより詳しく知れた喜びを表している。また、この探究的な学びの過程を振り返りながら、自分の成長も感じ、さらに、ここで学んだことを他にも生かしていきたいという意欲も喚起させている。

C子は、自己理解を深めていったことが、これからのことに役立っているのではという確信を得ている。また、探究的な学びの過程を通して、自分や友達のことがより詳しく知れた喜びも表している。

D男は、発表会を通して、自分のことを友達に知ってもらった喜びと、自分自身も自分のことを知れた喜びを表している。また、友達の発表からたくさんのことを知れた喜びも表している。さらに、発表に対する満足感も得ている。

E男は、友達の発表に対して、肯定的な評価を与えている。また、逆に友達から肯定的な発表に対する感想をもらい、満足感も得ている。さらに、およそ1ヵ月間にわたる探究的な学びの過程を通して、当初抱いていた緊張感が満足感へと変化している。

F男も、友達の発表に対して、肯定的な評価を与えている。また、探究的な学びの過程の中で取り組んだ、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、お家の方や身近にいる人にインタビューして聞いた事柄を順位付けをして絞っていったことや、プレゼンテーション・ソフトを用いて自分の考えを整理していったことなどを振り返っている。さらに、よりよい発表にするために、最後の最後まで粘り強く追究した姿も窺うことができる。

### (3) 授業者による個々の生徒の評価

授業者の下崎による個々の生徒の評価を表7<sup>28)</sup>に示した。評価は、3段階評価<sup>29)</sup>で行い、◎：「十分に目標を達成している」、○：「目標を達成している」、△：「目標を達成していない」とした。さらに表7には、評価を裏付けるための個々の生徒の様子についても記した。A男、B男、C子、D男、F男の5名は、設定した4つの目標の全てにおいて、「◎」という結果となった。E男は、目標②「自分の考えを筋道立てて分かりやすく

表7 授業者による評価

【単元の日標】		A男	B男	C子	D男	E男	F男
①自分の長所と自己課題を自己分析したり、お家の方や身近にいる人にインタビューしたりして、理解することができる。【知識・技能】		◎	◎	◎	◎	◎	◎
②自分の考えを筋道立てて分かりやすくクラスの友達に伝えることができる。【思考・判断・表現等】		◎	◎	◎	◎	○	◎
③自己課題を解決するための具体的な提案を考えることができる。【思考・判断・表現等】		◎	◎	◎	◎	○	◎
④今年1年間の自己課題を設定し、解決しようとする意欲を持つことができる。【学びに向かう力・人間性等】		◎	◎	◎	◎	◎	◎
生徒	【評価を裏付ける個々の生徒の様子】						
【A男】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、父母と祖母にインタビューしたりして、自己理解を深めることができた。また、6色ハット発想法を活用しながら、自分の考えを整理し、自己課題を解決するための見通しと意欲を持つことができた。さらに、人前で発表することに対して苦手意識を持っていたが、当日は、はっきりとした口調で、自信を持って発表することができた。						
【B男】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、しっかりと自己分析したり、父母と姉にインタビューしたりして、自己理解を深めることができた。また、6色ハット発想法を活用しながら、筋道を立てて自分の考えを整理し、プレゼンテーション・ソフトを活用した発表の練習も何度も繰り返し行った。その結果、当初抱いていた不安を払拭した発表ができた。さらに、自己課題の解決に向けた見通しと意欲も持つことができた。						
【C子】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、母と友達、先生にインタビューしたりして、じっくりと自分と向き合いながら自己理解を深めていった。また、6色ハット発想法では、提案内容に対するメリットとデメリットを考える場面で、自分を厳しく見つめながらデメリットについて考え、自己課題を解決するための見通しと意欲を持つことができた。発表も落ち着いてできた。						
【D男】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、父母にインタビューしたりして、自己理解を深めることができた。また、人前で発表することに対して苦手意識を持っていたが、6色ハット発想法を用いることで、発表内容が自分の中で明確化され、プレゼンテーション・ソフトを活用した発表に対して意欲的に取り組むことができた。さらに、自己課題の解決に向けた意欲も持つことができた。						
【E男】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、父母と姉にインタビューしたりして、自己理解を深めることができた。しかしながら、自己課題は明確化されたものの、それを解決するための提案内容を考える場面では、自己課題との関連性がやや弱い提案内容となった。ただし、その提案内容の自己に課された取り組みに対しては、強い意欲を持つことができた。						
【F男】	・「自分の好きなこと・得意なこと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析したり、母と姉にインタビューしたりして、自己理解を深めることができた。普段は直感的に作業を手早く進めていたが、今回は6色ハット発想法を活用しながら、じっくりと自分の考えを整理し、発表当日まで、どのようにすれば自分の考えがより分かりやすく伝えられるかについて粘り強く追究することができた。また、自己課題の解決に向けた意欲も持つことができた。						

ラスの友達に伝えることができる」と、目標③「自己課題を解決するための具体的な提案を考えることができる」が、「○」となり、他の目標①と④は、「◎」となった。

### 3 考察

前章で示した、授業後に生徒に実施したアンケート、生徒の授業後の感想、授業者による個々の生徒の評価の3つについて、それぞれ考察していくことにする。

まず、授業後に生徒に実施したアンケートについて考察する。先述した通り、アンケートの6つの質問項目の内、5つの質問項目（質問①、②、③、⑤、⑥）において、生徒の肯定的な回答を得ることができた。質問①、⑤の回答結果については、「6色ハット発想法」の手順が、子供たちが自分の考えを筋道立てて整理していく上で、効果的に働いたからであると解釈することができる。また、「6色ハット発想法」を用いて自分の考えを整理していく中で、「自分の現状分析」を基に考えた「提案内容」が現実的かどうか、「自分にとってのメリット、デメリット」という「見方・考え方」を基に検討する中で、自己課題とそれを解決するための提案内容が生徒たちの中でしっかりと明確化されたことにより、質問⑥の回答結果につながったと解釈することができる。

このように、自分の考えがしっかりと整理できたからこそ、お互いの発表内容が分かりやすいものとなり、さらに、発表での視覚的な効果を与えるプレゼンテーション・ソフトを活用したことで、質問③の回答結果につながったと解釈することができる。

質問②の回答結果については、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析以外にお家の方や身近に

いる人にインタビューを通して対話させたことにより、自分の考えが広がり、深い自己理解につながったと解釈することができる。

質問④の回答結果については、F男のみが否定的な回答を示した。この原因として、授業者の下崎は、授業当日（2017年6月26日実施）は、学校長と担任、百瀬の3名が参観したため、発表者の表情がいつもよりも緊張して硬くなり、F男は、発表者に感想を述べても、発表者の表情から自分の思いが伝わったかどうかの判断ができなかったからではないかと推察している。今後は、色々な場面で、人前で発表することや感想を伝えることの経験を積んでいくことが重要となる。

次に、生徒の授業後の感想について考察する。お家の方や身近にいる人へのインタビューをしての感想に関しては、生徒全員の自己理解を広げている様子を確認することができる。これは、「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」について、自己分析以外にお家の方や身近にいる人にインタビューを通して対話させたことが効果的に働いたからであると解釈することができる。

授業全体の感想に関しては、全員の生徒が個々に肯定的な感想を述べている。これは、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究的な学びの過程において、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込んだ単元が、個々の生徒に効果的に働いたからであると解釈することができる。

例えば、A男は、「提案内容」が現実的かどうか、「自分にとってのメリット、デメリット」という「見方・考え方」を基に考えることができたことを、B男は、探究的な学びの過程を通して自分が成長できた実感が持て、次への意欲が高まったことを、C子は、探究的な学びの過程を通して、自己理解や他者理解が深まったことと、そのことにより、今後のキャリア形

成への見通しが持てたことを、D男は、探究的な学びの過程を通して、自己理解や他者理解ができたことを、E男は、双方向性のある発表会によって得られた満足感と、探究的な学びの過程をやり抜いた満足感の両方を、F男は、「自分にとってのベスト3」という「見方・考え方」を基に、「自分の好きなこと・得意なこと」と、「嫌いなこと・苦手なこと」について、それぞれ整理できたことと、探究的な学びの過程において最後まで粘り強く追究したことを、それぞれ採り上げている。

最後に、授業者の下崎による個々の生徒の評価について考察する。設定した4つの目標において、全生徒が目標を達成させることができた。このことについて、下崎は、本研究で開発した単元が、生徒たちにとって効果的に働いたからであると述べている。具体的には、下記の3点について指摘している。

- ① 単元の学習内容が、生徒たちにとっては自分のことに関する内容であったので、意欲や見通しを持って粘り強く学習活動に取り組めたこと。
- ② 今までの学習面や生活面を「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」という「見方・考え方」を基に自己分析したり、お家の方や身近にいる人にインタビューをしたりしたことにより、自己理解が広がったこと。さらに、「自分にとってのベスト3」という「見方・考え方」を用いることで、自己分析及びインタビューした「自分の好きなこと・得意なことと、逆に嫌いなこと・苦手なこと」が、生徒の中で「自分の現状分析」として整理され、自己理解が深まったこと。
- ③ 「6色ハット発想法」を用いる場面で、「自分の現状分析」を基に考えた「提案内容」が現実的かどうか、「自分にとってのメリット、デメリット」という「見方・考え方」を基に検討させたことで、今後の取り組むべきことが個々の生徒に明確化されたこと。

なお、下崎は、E男が目標②と③で「○」という評価になった要因とし



て、E男の学習に対する特徴を挙げている。E男は、一つのことに集中して取り組む傾向がある。この一点集中型のスタイルは、彼の持つ良さであるが、ときにそのことで、全体とのつながりを失うこともある。今回の自己の現状分析における自己課題と提案内容との関連性が弱くなり、自分の考えを筋道立てて整理することに若干の課題を残した。下崎も、全体と部分とのつながりを持たせるためのE男に対する支援が不十分であった点を反省点として挙げている。

以上の授業後に生徒に実施したアンケート、生徒の授業後の感想、授業者による個々の生徒の評価による3つの考察から、開発した単元は、生徒たちが「主体的・対話的で深い学び」を実現していく上で効果があり、有用性があると結論付けることができる。今後の課題は、このような探求的な学習の過程の文脈の中で、人前で発表することや感想を伝える機会を増やしていくこと、個々の生徒の支援を充実させていくこと、今回の研究で未検証の提案内容に対する継続的な自己評価と他者評価の効果について、検証を進めていくこと、さらに、本研究で開発した単元を基にしながら、普通学級に在籍する児童・生徒を対象とした総合的な学習の時間の実践研究も進めていくことである。

## おわりに

以上、本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すための総合的な学習の時間の単元開発について追究した。具体的には、特別支援学校高等部（知的障害）の生徒1年生を対象に、総合的な学習の時間で重視されている「探求的な学びの過程（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）」の中に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を組み込みながら、自己のキャリア形成に関す

る学習活動を設定した単元開発を行い、授業実践を通して、その有用性について追究した。この開発した単元について、授業後に生徒に実施したアンケート、生徒の授業後の感想、授業者による個々の生徒の評価の3点から検証した結果、その有用性を確認することができた。

今後の課題は、探求的な学習の過程の中で、①人前で発表すること・感想を伝えることの機会を増やしていくこと、②個々の生徒の支援を充実させていくこと、③今回の研究で未検証の提案内容に対する継続的な自己評価と他者評価の効果について、検証を進めていくこと、④本研究の成果を踏まえながら、普通学級に在籍する児童・生徒を対象とした総合的な学習の時間の実践研究も進めていくことである。この4点を今後の課題として追究していきたい。

#### 注・引用文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)、pp.49-53（2017年4月23日検索）を参照。
- 2) 同上書1）、p.49（2017年3月4日検索）。
- 3) 同上書1）、pp.49-50（2017年3月4日検索）を参照。
- 4) 同上書1）、p.50（2017年3月4日検索）。
- 5) 同上書1）、p.50（2017年3月4日検索）。
- 6) 本研究は、百瀬と下崎の協議の基に進めたものである。本稿の執筆は、百瀬が担当し、下崎は、授業者及び表7「授業者による評価」における個々の生徒の評価を担当した。
- 7) 「主体的・対話的で深い学び 総合的な学習の時間」の他、「アクティブ・ラーニング 総合的な学習の時間」もキーワードとして、「CiNii Articles」で論文検索を試みた（2017年8月23日検索）。その結果、前者は全1件、後者は全19件の結果となった。その中で、総合的な学習の時間で「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を単元のどこに、どのように用いるかを具体的に明示して単元開発を行った研究は、

全0件という結果であった。なお、百瀬・下崎による先行研究で、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「国語」の実践研究がある。ここでは、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すために、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を用いた「教材開発」について追究した。百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して—」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104に詳しい。

- 8) この3つの検証方法は、百瀬・下崎の共同研究において有用性があることが確認されており、本研究でも活用することにした。この3つの検証方法を用いた百瀬・下崎による先行研究として、百瀬光一・下崎聖「特別支援学校に在籍する生徒のコミュニケーション能力を高めるための教材・単元開発に関する研究—クラス集団内での共同学習を通して—」『山梨学院大学法学論集』第74号、2014年、pp.116-99、百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み—紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して—」『教材学研究』第27巻、2016年、pp.77-86、前掲書7)で示した百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して—」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104、百瀬光一・下崎聖「特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究—特別活動と教科等の関連を中心として—」『山梨学院大学法学論集』第80号、2017年、pp.79-112、の4つの研究がある。
- 9) 本研究は、学校長の他、個々の生徒による本研究の公表についての同意を得た上で、進められてきたものである。
- 10) 百瀬・下崎によるキャリア教育に関する先行研究として、前掲書8)で示した中の、百瀬光一・下崎聖「特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究—特別活動と教科等の関連を中心として—」『山梨学院大学法学論集』第80号、2017年、pp.79-112がある。そこでは、特別支援学校高等部（知的障害）の2年生の生徒を対象に、企業内職場体験学習とリンクさせたキャリア教育を行った。本研究で行うキャリア教育の導入的な内容に対し、卒業後の具体的な就労を意識させた内容になっている。この点が本研究との大きな違いである。
- 11) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別紙」（2016年12月21日）[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_2.pdf)、p.26（2017年3月4日検索）を参照。そこでは、「キャリア教育に関わる資質・能力」として、キャリア教育で育成をめざす「基礎的・汎用的能力」の4つの能力（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自

己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」)を統合的に捉え、資質・能力の三つの柱に沿って次のように整理している。すなわち、i) 知識・技能(・学ぶこと・働くことの意義の理解、・問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりするための方法に関する理解と、そのために必要な技能、・自分自身の個性や適性等に関する理解と、自らの思考や感情を律するために必要な技能)、ii) 思考力・判断力・表現力等(・問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりすることができる力、・自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」をもとに、自分と社会との関係を考え、主体的にキャリアを形成していくことができる力)、iii) 学びに向かう力・人間性等(・キャリア形成の方向性と関連づけながら今後の成長のために学びに向かう力、・問題を発見し、それを解決しようとする態度、・自らの役割を果たしつつ、多様な人々と協働しながら、よりよい人生や社会を構築していこうとする態度)、である。前掲書<sup>10)</sup>で示した百瀬・下崎の先行研究においても、単元目標を設定する際に、この「キャリア教育に関わる資質・能力」を参照した。

- 12) 文部科学省「小学校学習指導要領」(2017年3月31日) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf), p.160 (2017年8月23日検索)、文部科学省「中学校学習指導要領」(2017年3月31日) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2017/06/21/1384661\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/06/21/1384661_5.pdf), p. 144 (2017年8月23日検索)。双方における総合的な学習の時間の目標は、次の通りである。探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようになる。(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。なお、ここで記した検索日(2017年8月23日)は、引用箇所及び該当頁を再確認するために検索した月日である。
- 13) 前掲書1), pp.49-50 (2017年3月4日検索)。
- 14) 前掲書1), pp.241-242 (2017年3月4日検索)を参照。ここでは、「主体的な学び」の視点では、課題設定と振り返りが重要であることなど、「対話的な学び」

の視点では、多様な他者と力を合わせて問題の解決取り組むことが重要であることなど、「深い学び」の視点では、課題設定の場面で課題を自分事として捉えること、整理・分析の場面で、「探究的な（探究の）見方・考え方」を働かせることが重要であることなど、それぞれの視点が具体的に示されている。

- 15) 前掲書 8) で示した中の、百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み—紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して—」『教材学研究』第27巻、2016年、pp.77-86、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して—」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104に詳しい。
- 16) 同上書15) の2つの研究に詳しい。
- 17) 前掲書 1), p.237 (2017年 3月 4日 検索)。
- 18) 前掲書 1), p.238 (2017年 3月 4日 検索)。
- 19) 前掲書 8) で示した中の、特に、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して—」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104と、百瀬光一・下崎聖「特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究—特別活動と教科等の関連を中心として—」『山梨学院大学法学論集』第80号、2017年、pp.79-112の2つの研究において、生徒の実態に応じて開発した数種類の学習カードとの連動を図りながら行った、「3つ選択（ベスト3選択）」（順位付け）は、生徒にとっては、色々な思いや考えをめぐらせながらそれらを整理し、具体化させていく上で有用性があることが確認できた。具体的には、前者は、「自分のお気に入りベスト3」として、自分にとってのベスト3を、後者は、「みんなのために、これだけは教えたい重要ポイントベスト3」として、友達にとってのベスト3を選ばせた。
- 20) 三田大樹「総合5年生森をまちに商品開発プロジェクト～スペシャリストとの真剣勝負～」田村学・黒上晴夫『教育技術 MOOK 田村学・黒上晴夫の「深い学び」で生かす思考ツール』小学館、2017年、pp.19-23に詳しい。そこでは、提案した3つの商品を複数の視点から見直し、新たな活動を見いだす場面で、「メリット・デメリットチャート」を活用している。具体的には、左側にメリットを、右側にデメリットを書き込み、それぞれを対比させながらまとめていくものである。
- 21) 前掲書 8) で示した中の、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して—」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104にある表1

- (p.95)と表2 (p.96)の形式を活用した。
- 22) E・デボノ(著)・松本道弘(訳)『デボノ博士の[6色ハット]発想』ダイヤモンド社、1986年に詳しい。本研究では、児童・生徒用に解説された、NHK『テストの花道』制作チーム『テストの花道』河出書房新社、2011年、pp.126-131を参照した。
  - 23) 同上書22)のNHK『テストの花道』制作チーム『テストの花道』河出書房新社、2011年、pp.126-131を参照。
  - 24) 前掲書19)の2つの研究に詳しい。
  - 25) 前掲書8)で示した中の、百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み—紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して—」『教材学研究』第27巻、2016年、pp.77-86と、百瀬光一・下崎聖「特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究—特別活動と教科等の関連を中心として—」『山梨学院大学法学論集』第80号、2017年、pp.79-112の2つの研究において、発表者に対する感想を自分なりに表現することを促すための学習カードの開発が課題となっていた。本研究では、その課題を解消することを目的に学習カード4を開発したが、特に今回は、感想の内容に重点を置くのではなく、まず、生徒が気軽に感想が言えることと、感想発表そのものに慣れることに重点を置くようにした。
  - 26) 百瀬・下崎の先行研究で用いてきたアンケート結果をまとめる形式を今回の研究でも用いることにした。この形式を用いた百瀬・下崎の先行研究として、前掲書15)で示した2つの研究がある。前者は、p.82、後者は、p.99に詳しい。
  - 27) お家の方や身近にいる人へのインタビュー活動の有効性について、生徒の感想からも検証するために、「授業全体の感想」とは別に、「お家の方や身近にいる人へのインタビューをしての感想」も生徒に書かせるようにした。同様の形式を用いた百瀬・下崎の先行研究として、前掲書15)で示した2つの研究がある。前者は、pp.81-82、後者は、pp.99-100に詳しい。
  - 28) 百瀬・下崎の先行研究で用いてきたものと同様の評価の方法及びまとめの形式を今回の研究でも活用することにした。この形式を用いた百瀬・下崎の先行研究として、前掲書15)で示した2つの研究がある。前者は、p.83、後者は、p.101に詳しい。
  - 29) この3段階評価は、百瀬・下崎の先行研究において、授業者の下崎が個々の生徒を評価する段階で、継続して用いてきた評価方法である。授業者の下崎が、この評価方法に習熟している点を踏まえ、さらに、本研究においても引き続いて活用することにした。この評価方法を用いた百瀬・下崎の先行研究として、前掲書8)で示した4つの研究がある。

## 謝辞

A県立B特別支援学校のC校長先生及び担任のD先生には、本研究を進めるにあたり多大なる協力を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。